

# 文副詞「もちろん」の意味

陳 若 婷  
(2014年10月2日受理)

## Semantics of Sentence Adverb *Mochiron*

Chen Joting

**Abstract:** This paper aims at clarifying the semantics of Japanese sentential adverb *mochiron*. In the previous research, *mochiron* is equated with English expression 'needless to say', and usually translated as 'of course'. More specifically, *mochiron* indicates the speaker's acknowledgement of -and agreement on-the hearer's belief or expectation. In this study, however, I argue that the hearer's belief is not essential in order to use *mochiron*. As an alternative account, I propose that the proposition **p** of '*mochiron p*' is inferred from two premises: **p**' and a hidden reason **r**. That is, the speaker assumes that **p**' is shared by all discourse participants as a common ground, but **p** is not because **r** may not exist in hearer's knowledge and belief. As a result, the speaker and hearer may have different belief about **p** (**p** or not **p**), and the speaker expresses **p** with *mochiron* in order to convey the idea that **p** is inferred from **p**' and reason **r**.

Key words: inference, knowledge and belief, a hidden reason, public belief, common ground  
キーワード: 推論, 知識・信念, 隠された理由, public belief, 共通基盤

## 1. はじめに

文副詞「もちろん」は命題の真理値に影響を与えない。(1)(2)の真理値は、(1')(2')の真理値と同様である。

- (1) 夏はもちろん暑い。(森田2005: 1132)
- (2) S先生の授業はもちろん難しい。

- (1) 夏は暑い。
- (2) S先生の授業は難しい。

しかし、(1')(2')と異なり、(1)(2)は命題に対し「言うまでもない」という話し手<sup>1</sup>の主観を付加している。森本(1994)では、「もちろん」のような副詞について、「文の内容の真理値についての意見を担うもので、お

およその意味を説明的にいうと、『私の言うことは真実である』ということになるだろう」と述べられている(p.114)。

「もちろん p」が既存の文脈に付加する情報は「命題 p が真である」のほか、「命題 p が真であるのは当然だ」という話し手の態度である。しかし問題は、なぜ既に真であるとされている命題に対して、さらにそれは当然であるということ付加するのかということである。本稿では、このような問題意識をもち、「もちろん」の意味を明らかにすることを目的とする。

本稿の構成として、まず2節では先行研究の成果と問題点を見た上で、本稿の視点を述べる。3節では、「もちろん」の使用条件から「もちろん」の基本的意味を考察する。4節では本稿の結論と今後の課題を述べる。

## 2. 先行研究の検討と本稿の視点

### 2.1 森本(1994): 聞き手の推測と期待

「もちろん」の意味について、森田(2005)では、「もちろん」は「その話題や事柄に対して肯定・否定の判

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員: 白川博之(主任指導教員), 酒井 弘,  
畑佐由紀子, 永田良太

断を考慮する余地がなく、判断以前に回答が決まっているの意」と説明され、「言うまでもなく」に近いとされている(森田2005:1132)。(3)と(4)はそのような例である。

- (3) 「熱を加えればもちろん膨張する。」(p.1132)  
 (4) 「梅雨だと言っても、もちろん雨の降らない日だってある。」(p.1132)

さらに森本(1994)では、「もちろん」を伴わない文と比較することにより「もちろん」の使用は聞き手の推測や期待と関わると説明されている(p.140)。

- (5) P: 木村さんが途中で病気になるしました。  
 Q: そうですね。  
 P: a. すぐ病院へ運びました。  
     b. もちろんすぐ病院へ運びました。  
 (森本1994:139:(30))

(5)では、話し手Pは、聞き手Qが、耳にしたことから何らかの推測をしていると想定し、それはわかっていること、しかもそれは正しいことを積極的に肯定する態度を見せていると説明されている(p.140)。つまり、「もちろんp」のpは話し手が想定する聞き手の(傾きをもった)認識である。(5)の場合、pは「すぐ木村さんを運んだ」コトである。話し手は「もちろん」を用いることにより、聞き手の考えを積極的に肯定するのである。

また、聞き手の期待がはっきり言語化されている場合には、話し手が想定しなければならないことはない(同:140)としている。(6)はそのような例である。

- (6) P: わたしも行ってもいいですか。  
 Q: ええ、a. いいです。  
     b. もちろんいいです。  
 (森本1994:140:(31))

(6)では、「もちろん」は「Pの予期したことを自分も受け入れている、その通りだと積極的に肯定する(同:140)」機能をはたしている。

以上の説明から、「もちろん」の使用は聞き手の命題に対する認識的傾きや期待のあり方と関わると言えよう。

しかし、聞き手の命題に対する認識的傾きや期待のあり方は「もちろん」を使用する理由ではない。ここで命題に対する認識的傾きが見られる否定疑問文の用例から検証してみる。否定疑問文は発話者の命題に対

する認識的傾き(epistemic bias)が見られる表現であり(井上1994, Ito and Oshima(to appear)など)、またIto and Oshima(to appear)では、異なるプロソディが話し手の異なる認識的傾きを表している指摘されている。(発話者の傾きを示すためアルファベットで表記し、ピッチは大文字かつ太文字で示す。)

- (7) Aが¬pだと思っている(否定のnaiにはピッチが入っている)  
 A: Sore **K**Araku**N**Ai?  
 B: Un, Karakunaiyo.  
 B': Iya, Karaiyo.  
 (8) Aがpだと思っている(否定のnaiにはピッチが入っていない)  
 A: Sore **K**Arakunai?  
 B: Un, Karaiyo.  
 B': Iya, Karakunaiyo.

このように、否定疑問文に対する応答には4つの場合が見られる。森本(1994)の記述によれば「もちろん」は(7B)と(8B)でのみ用いられるはずであるが、次の例(9)と(10)で見られるように「もちろん」はこの4つの場合すべてで用いられる。

- (9) Aが¬pだと思っている  
 A: Sore **K**Araku**N**Ai?  
 B: Un, mochiron Karakunaiyo.  
 B': Iya, mochiron Karaiyo.  
 (10) Aがpだと思っている  
 A: Sore **K**Arakunai?  
 B: Un, mochiron Karaiyo.  
 B': Iya, mochiron Karakunaiyo.

また、相手の期待に同意を示すという記述とは裏腹に、相手の期待に反する場合であっても「もちろん」が用いられる例がある(□内は筆者によるものである)。

- (11) [魔女のキキと黒猫のジジが修行するため、自分の町を出た。キキは初めて見た海沿いの町が気に入るその町を修行先と決め、降りようとしている。一方、ジジはその町が大きすぎだと心配している。そしてこの心配と降りない方がいいという気持ちをキキに教えていた。]  
 黒猫ジジ「(それは本気かという気持ちで)本

当に降りる気?」 [pカ]  
 魔女キキ「もちろんよ」 [モチロンp]  
 (『魔女の宅急便』)

花子「あれ、救急車、来る。」  
 太郎「#もちろん。」 (作例)

- (12) [ほかのゼミの合宿に参加したい学生 A]  
 A「わたしも行ってもいいですか」  
 B「もちろんだめです。」 (実例)

(11) では、p は「この海沿いの町で降りるコト」、 $\neg p$  は「この海沿いの町で降りないコト」である。この場合、ジジの発話は単純真偽疑問文「pカ」である<sup>2</sup>。ジジは p の可能性があると想定しているが、文脈によるとジジの期待はここで降りたくないことであるとわかる。つまり、この場合、ジジの発話は「pカ」であるが、それはジジが「 $\neg p$ 」を期待して「キキが p だと思っていること」は本当かどうか、ということを知っていることである。キキの発話はジジの期待に反するものであるが、「もちろん」の使用は自然である。

さらに、(12) では聞き手 A の「参加したい」という期待がはっきり現れている。しかし、ここでも「もちろん」の使用は自然である。

また、聞き手の認識の傾きに反する実例も見られる。(13) では、話し手 B は聞き手 A の認識が間違っていると思っており、「もちろん」を用いることで命題 p(「ロシアの夏は暑いコト」) の当然性を A に認識させようとしている。

- (13) A「ロシアの夏は寒いでしょう。」  
 B「いいえ、ロシアの夏はもちろん暑いですよ。」  
 (作例)

これらの例から、聞き手の認識的傾きや期待のあり方などが「もちろん」を使用する本質的な理由でないことがわかる。つまり、話者がなぜ「もちろん」を使用するのかといった疑問点は残されたままである。

## 2.2 森田 (2005) : 基本的意味「言うまでもない」

また、基本的意味「言うまでもない」という記述にも問題点がある。森田 (2005) では「もちろん」は、理由意識は必要ない、考慮する必要はない (p.1132)、論理以前と言っている (p.1133) と述べられ、意味は「言うまでもない」に近い (p.1132) と説明されている。しかし、次の例が示すように、「言うまでもない」場面であるにもかかわらず、「もちろん」の使用が不適切である場合がある。

- (14) [花子は太郎の運転している車に乗っている。2人は救急車を見た。]

(14) では、「救急車が来る」といった事態は車の中にいる二人とも共通に認識していることであり、「言うまでもない」ことであると言える。しかしこの場合、「もちろん」の使用は不適切である。このことから、「もちろん」の意味を、「言うまでもない」であるとする先行研究の記述は十全ではなく、再検討の必要がある。

本稿では前述した話し手がなぜ「もちろん」を使用するのかという問題意識から、「もちろん」の意味を考察する。

## 2.3 本稿の視点

本稿では、「もちろん」の使用は、話し手の命題に対する認識・信念のみではなく、聞き手の認識・信念や会話参加者の相互信念とも関わっていると考えられる。また、このようなことを理論化したものとして、'Common Ground' (共通基盤) (Stalnaker, 1978) や、'public belief' (Gunlogson, 2003) という概念がある。本稿ではこれらの概念が「もちろん」の意味を記述する際に有効であると考え、この二つの概念を用いることにする。2.3.1 ではこの二つの概念を説明し、2.3.2 でこの二つの概念と「もちろん」の関わりを述べる。

### 2.3.1 Common Ground(CG) と public belief(PB)

Stalnaker(1978) では、Common Ground(以後、CG と略称) について、会話参加者が共有されている知識・信念、しかもこの知識・信念をもっていることをお互いに知っていることと説明され、これが会話の共通基盤であると説明されている。

また、Gunlogson(2003) は Stalnaker(1978) の CG の規定にしたがい、さらに CG を会話参加者の public belief(以後、PB と略称) の交わりであるとしている。そして会話参加者の PB を以下のように詳細に規定している。

- (15) Public belief :  
 Let  $PB_A$  and  $PB_B$  be sets of propositions representing the public beliefs of A and B, respectively, with respect to a discourse in which A and B are the participants, where:  
 a. p is a public belief of A iff 'A believes p' is a mutual belief of A and B  
 b. p is a public belief of B iff 'B believes p' is a mutual belief of A and B  
 (Gunlogson, 2003, 42)

(15a) は、話者 A の public belief( $PB_A$ ) とは、話者

A が p を信じていることが会話参与者 A と B の相互信念 (すなわち, A の知識・信念が共有されている) であるという説明であり, (15b) は話者 B の public belief(PB<sub>B</sub>) とは, 話者 B が命題 p を信じていることが会話参与者 A と B の相互信念であるという説明である。そして CG が会話参与者の知識・信念の交わりであるというのは, 会話参与者が共に p を信じており, かつ, この知識・信念はお互いに共有されていることである。式と図で表すと (16) と図1のようになる。(図1は筆者によるものである。)

$$(16) \quad CG_{\{A, B\}} = PB_A \cap PB_B$$

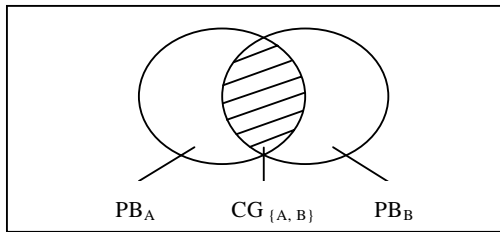


図1 CG のベン図による視覚化

会話において, 会話参与者の知識・信念は, それぞれの発話により文脈 (context) に提供 (update) される。

例えば, 次の例文 (17) における p は「明日雨なので, 運動会は中止であるコト」である。ここでは花子と太郎は発話して自分の知識・信念 p を提供する。またそれらはお互いに受容され, CG の一部となる (この場合, p と CG の関係は  $p \in CG$  で表すことができる。p が CG に属していない場合は  $p \notin CG$  で表す)。

- (17) 花子「明日雨なので, 運動会は中止だね」  
 太郎「そうだね, 雨が降るので運動会は中止だね」 (作例)

以上が CG と PB の定義である。次に命題 p が CG に入っている場合と, 入っていない場合の相違について, (18) と (19) で説明する。

- (18) [花子には妹が3人いる。太郎はこのことを知っているが, 花子は太郎が知っていることを知らない。]  
 花子「私, 妹, 3人いるよ。」  
 太郎「知っているよ。」 (作例)

- (19) [花子には妹が3人いる。太郎はこのことを知っている。花子は太郎が知っていることをかつて

- は知っていた。]  
 花子「#私, 妹, 3人いるよ。」  
 太郎「知っているよ, 前に言ったじゃないか?」 (作例)

(18) と (19) では問題となっている命題は「花子には妹が3人いるコト」である。(18) では, 会話参与者がこの知識・信念を共有しているが, 共有していることをお互いに知らない (すなわち,  $p \notin CG$ )。 (19) は会話参与者がこの知識・信念を共有しており, かつ, 共有していることをお互いに知っている場合である (すなわち,  $p \in CG$ )。

(18), (19) で花子の発話は情報提供の表現 (平叙文) であるが, (18) ではその発話が適切であるのに対し, (19) では不適切である。その原因は, (19) の場合, 命題 p が会話参与者の共通基盤となっているからである。

(19) が示すように, 花子の知識・信念では, 太郎が命題 p を知っており, 2人にとって p は既知のことのはずである。そのため, p を情報として提供するのは不適切となる。一方, (18) では p が共通基盤になっていないため, p を情報として提供することができる。

(18) と (19) から, 会話参与者の知識状態と共通基盤が発話の内容に影響していることがわかる。また命題が共有されることと, CG に属していることは異なっていることもわかる。

さて, 命題が真であることを前提とする副詞「もちろん」は, CG や PB という概念とどのような関わりがあるのだろうか。そのことを次の小節で見る。

### 2.3.2 「もちろん」と CG, PB との関わり

本稿の研究対象「もちろん」の意味は「言うまでもない」とされている。すなわち, 「命題 p が言うまでもない」というのは, 命題 p が会話参与者によって共有されているものであり, かつ, この知識・信念をもっていることをお互いに知っていることである。これは会話の共通基盤であると言える (だからこそ言う必要はない)。この意味で「もちろん p」の p は CG に属すはずである。

しかし, (20) が示すように, p が CG に属す時には「もちろん」は用いられない。

- (20) 花子<sub>1</sub>「明日雨なので, 運動会は中止だね」  
 太郎<sub>1</sub>「そうだね, 雨が降るので運動会は中止だね」  
 花子<sub>2</sub>「#もちろん」

(20) の場合, 太郎と花子は同様に p 「明日雨なので,

運動会は中止であるコト」が真であると思っている。そのため、太郎<sub>1</sub>の発話を「もちろん」に置き換えても自然である。しかし、花子<sub>2</sub>では「もちろん」の使用が不適切である。その理由は、花子<sub>1</sub>と太郎<sub>1</sub>でそれぞれ花子と太郎の知識・信念が提供された結果、命題 p が CG に入っているからである。

この事実から次のことがわかる。会話において発話者にとって当然であり、言うまでもないことであっても「もちろん」は用いられないことである。つまり、「もちろん」の使用は、発話者の信念・知識のみではなく、会話参加者の知識・信念、及び相互信念にも影響されている。そこで、本稿では、このようなことを詳細に規定する CG と PB の概念を通じ、「もちろん」の意味を考察することにする。

### 3. 「もちろん」の基本的意味

3節では、「もちろん」の使用条件から基本的意味を考察する。「もちろん」の使用に際しては二つの条件があると考えられる。まず、「もちろん p」という判断を下すために、話し手の知識・信念には p' と隠された理由 r の存在が要求されることである。これを3.1節で説明する。次は「もちろん」を使用する場合は、「もちろん p」の p が CG に属していないときに限ることである。これを3.2節で説明する。最後に3.3節で「もちろん」の基本的意味をまとめる。

#### 3.1 p' と隠された理由 r

ここで、(14)の文脈を少し変え、(21)と(22)を比べ、「もちろん」の最初の使用条件を述べる。

- (21) [花子は太郎の運転している車に乗っている。2人は救急車を見た。]  
花子「あれ、救急車、来る。」  
太郎「もちろん。」 (= (14))
- (22) [花子は太郎の運転している車に乗っている。2人は車の事故を見た。その後、2人は救急車を見た。]  
花子「あれ、救急車、来る。」  
太郎「もちろん。」

(21)と(22)を比較すると、(22)の場合、太郎の知識・信念には「車の事故があった」という前提がある。この「車の事故があった」ということを p' とする。また太郎の知識・信念には隠された理由、「車の事故があれば救急車が来る」という知識が存在する。これを r とする。(22)の場合、話し手である太郎の知識・

信念では、この二つの前提 (premise) から、命題 p 「救急車が来る」という帰結が導かれる。r の存在は、「もちろん」の発話の後、「さっき事故あったから」、「さっき事故あったじゃないか」が続けられることからうかがえる。

これに対し、(21)の場合、話し手である太郎の知識・信念に「車の事故があった」という前提がない。そのため、「車の事故があれば救急車が来る」という知識も(もっていたとしても)活性化されていない。この二つの前提が欠けているため、「救急車が来るコト」が導かれない。

つまり、この場合、太郎の知識・信念では、「救急車が来る」という命題は前提から推論された帰結ではない。それゆえ、太郎にとってこの命題が真であっても、「もちろん」は用いられない。

このように、(21)と(22)の文脈状況の相違から、「もちろん p」の p は p' と r から推論される命題であることがわかる。これが「もちろん」を使用するときに必要な条件の一つである。

次に、p' と r の特徴についてさらに検討する。まずは、p' に課される条件について述べる。

#### 3.1.1 p' に課される条件

ここでは(21)の文脈情報を少し変え、2.3で述べた CG の概念を用いて検討する。

- (23) [花子は太郎の運転している車に乗っている。しかも寝ている。太郎は花子が寝ている時に車の事故を見た。その後、花子が起きて2人は救急車を見た。]  
花子「あれ、救急車、来る。」  
太郎「もちろん。」

この例では、「もちろん」の使用は不適切である<sup>3</sup>。その理由は p' 「事故があった」という前提が会話参加者の花子に共有されていないからである。花子の知識・信念には p' がいないため、命題 p という帰結が導かれないのは当然である。したがって前提 p' はすべての会話参加者に共有されていることが要求されている。言い換えると、p' が会話の共通基盤 (CG) に存在しなければならない。

ところで、例(24)のように、p' が先行文脈に直接現れて(言語化されて)おらず、会話の共通基盤 (CG) に存在していないように見える場合もある。

- (24) 太郎は mac の愛用者である。もちろん windows も使っている。

(24) では、 $p'$  を「ある人はパソコンを使う人である」、 $r$  を「ある人がパソコンを使う人であれば、windowsを使う」と仮定する。先行文脈では  $p'$  は直接現れていないが、会話参与者(聞き手または読み手)に共有されていると想定されている。そのため、ここでの  $p'$  はやはり会話参与者に共有されている知識・信念として扱われている。

以上のことから、(23) のように、 $p'$  は確かに会話の共通基盤であるが、この共通基盤は話し手の想定によるものであることがわかる。

### 3.1.2 $r$ に課される条件

一方、理由  $r$  に関して、ここでは次の例文 (25) から、その特徴を見る。

(25) [花子は太郎の運転している車に乗っている。2人は車の事故を見た。その後、2人は救急車を見た。]

花子「あれ、救急車、来る。」

太郎「もちろん。」 (= (22))

この例では、二つの知識・信念が見られる。一つは太郎の知識・信念、もう一つは花子の知識・信念である。太郎の知識・信念では、 $p'$  (「事故があった」) と  $r$  「事故があれば、救急車が来る」から  $p$  「救急車が来る」という帰結が導かれている。したがって、太郎にとって「救急車が来る」ことは言うまでもなく、当然のことである。その一方、花子の知識・信念はそうではない。このことは意外なことに気づく意味を有する「あれ」という発話からうかがえる。したがってこの場合、花子は  $p'$  を知っているが、救急車を見た時に  $p$  を当然の事態として見ていないと考えられる。その原因は、花子の知識・信念の中に  $r$  が欠けている(あるいは活性化されていない)からだと思われる。このことから、聞き手に  $r$  が欠けている(あるいは活性化されていない)ことが  $r$  に課される条件であると考えられる。

ここでもう一つの例を見る。

(26) [花子は太郎の運転している車に乗っている。2人は車の事故を見た。]

花子「救急車、来るかな?」

太郎「もちろん。(さっき事故あったじゃん)」

(26) の場合、花子の知識・信念では「救急車が来る」という判断はまだ成立していない。しかし、花子の発話から花子は  $r$  「事故があれば、救急車は来る」ということを意識して発話することがわかる。つまり、花子の知識・信念では、 $r$  の可能性を考えているが、 $r$

を確信していないため、 $p$  という判断が成立していないのである。

ここで、「もちろん」のもう一つの条件をまとめる。それは話し手である太郎の知識・信念では、 $p'$  と  $r$  から  $p$  が推論されるが、聞き手の花子の知識・信念は  $r$  が不確かであるため、 $p'$  から  $p$  が導かれないということである。その結果、聞き手は命題  $p$  「救急車が来る」ということに対し、不確かであるか疑問に思われている。

次は、命題  $p$  の特徴を見る。

### 3.2 命題 $p$ が CG に属していない

3.1節で、隠された理由  $r$  が会話参与者に共有されていない場合には、 $p$  が導かれないことを見た。また、2.3節で「もちろん  $p$ 」の  $p$  が CG に属す場合、「もちろん」が用いられないことも見た。ここで、改めて  $p$  の特徴について検討する。

(27) 花子<sub>1</sub>「明日雨なので、運動会は中止だね」

太郎<sub>1</sub>「そうだね、雨が降るので運動会は中止だね」

花子<sub>2</sub>「#もちろん。」 (= (20))

(28) [明日の運動会を期待している太郎に]

母親「明日雨なので、運動会は中止だね。」

太郎「へえ、雨が降ったら運動会は中止になるの?」

母親「もちろん。」

(27) では花子と太郎は  $p$  「運動会が中止である」という命題に対し、同じ知識・信念をもっている。それに対し、(28) では、母親の知識・信念は子どものものと異なっている。(27) では、「もちろん」が不適切であるのに対し、(28) では「もちろん」が用いられる。このことから、「もちろん」が適切である文脈は  $p$  が会話者に共有されていない場合であるとわかる。

ここで、2.1で取り上げた例を再検討する。

(29) [魔女のキキと黒猫のジジが修行するため、自分の町を出た。キキは初めて見た海沿いの町が気に入ってその町を修行先と決め、降りようとしている。一方、ジジはその町が大きすぎだと思って心配している。そしてこの心配と降りない方がいいという気持ちをキキに教えていた。]

黒猫ジジ「(それは本気かという気持ちで) 本当に降りる気?」

魔女キキ「もちろんよ」 (= (11))

- (30) A「わたしも行っていいですか」  
 B「もちろんいいです。」 (6)を改作)

例(29)では、問題となっている命題  $p$  は「キキがここに降りるコト」である。聞き手である黒猫ジジの発話から、ジジは「キキがここに降りるコト」を不確かだと思っていることがわかる。これに対し、話し手であるキキは  $p$  が真であると思っている。

例(30)では、問題となっている命題  $p$  は「Aが行っていいコト」である。Aの疑問文の発話から、Aは「Aが行っていいコト」を不確かであると思っていることがわかる。これに対し、話し手Bは  $p$  が真であると思っている。つまり、 $p$  に関して、話し手と聞き手の間に、認識の不一致ということがあり、 $p$  はCGに属していない。

ここから、「もちろん」の使用条件を「 $p$  がCGに属していない」とまとめることができる。

ここで、会話参与者における理由  $r$  の存在と  $p$  に関し、もう一つの用例を見る。

- (31) [花子が太郎の数学の式を間違っていると指摘している。]  
 花子「これだけで  $X$  は成り立たないよ、数学的に言うとな」  
 太郎「もちろん! (「だからここもう一つの条件を入れているよ!」)」

(31)では、命題  $p$  は「 $X$  が成り立たないコト」である。花子の発話から花子にとって  $p$  が真であることがわかる。つまり、花子の中には「これだけであれば、 $X$  は成り立たない」という知識  $r$  が存在している。また、太郎の発話から太郎の知識・信念にも  $r$  が存在していることがわかる。この場合、会話参与者2人の知識・信念に  $r$  が存在している。ここで不確かになっているのは、太郎の知識・信念に対する認識である。

聞き手の花子の知識では、 $r$  や  $p$  が真である。しかし、花子は太郎の中に  $r$  が欠けているから、 $p$  が真ではないと思っていると想定している。太郎はそれを意識して、「もちろん」を用いることにより、自分の中にも  $r$  が存在しているから当然  $p$  が真であると思っていることを表している。したがってこの例は一見するとこれまでの例とは異なるが、 $r$  や  $p$  に対する不確かさや認識の不一致が存在していると考えられる。

### 3.3 「もちろん」の基本的意味

以上の議論を踏まえて、「もちろん」の意味は(32)のようにまとめることができる。本稿では基本的に Chen and Yamada(2014)にしたがうが、(iii)に関して

は、(31)のような例を説明するために、もう一つ条件を加える必要がある<sup>4</sup>。

- (32) 「もちろん」の基本的意味  
 「もちろん  $p$ 」は以下のような条件では適切である。
- (i) 話し手の知識・信念では、 $p'$  が会話の共通基盤に属している。かつ、 $p$  が会話の共通基盤に属していない。
  - (ii) 話し手の知識・信念には隠された理由  $r$  が存在している。「もちろん  $p$ 」の  $p$  は前提  $p'$  と理由  $r$  から導かれた帰結である ( $r$  はゼロ集合ではない)。
  - (iii) 聞き手の知識では、 $p'$  から  $p$  が導かれない(つまり、聞き手の知識には  $r$  が無い)または、聞き手は話し手の知識・信念に、 $r$  が欠けているため  $p$  が導かれないと想定している。

## 4. おわりに

### 4.1 まとめ

本稿では「もちろん」の基本的意味についてCGとPBの概念を用いて考察を行った。考察の結果は次の2点にまとめることができる。

- ① 「もちろん」の意味は先行研究で記述された聞き手の期待とは直接の関係はない、また、命題が「言うまでもない」ことであるという意味になるのは、前提 (premise) から導かれた帰結であるためである。
- ② 「もちろん  $p$ 」の  $p$  はCGに属していないこと、また、話し手と聞き手の間に理由  $r$  をめぐって認識の不一致があるという条件が必要である。

先行研究では「もちろん」の機能は聞き手の推測や期待を積極的に肯定することであると説明されている(森本1994:140)が、この記述では例(33)が説明できなかった。ここで改めて本稿の結果を用い、例(33)を説明してみる。

- (33) [魔女のキキと黒猫のジジが修行するため、自分の町を出た。キキは初めて見た海沿いの町が気に入ってその町を修行先と決め、降りようとしている。一方、ジジはその町が大きすぎだと思って心配している。そしてこの心配と降りない方がいいという気持ちをキキに教えていた。]  
 黒猫ジジ「(それは本気かという気持ちで)本当に降りる気?」

## 魔女キキ「もちろんよ」

例 (33) に関し、先行文脈にもう一つの事実がある。キキが町を出る前に、友人たちに海のある町を探すつもりと言っていた。その時、ジジもいた。

この場合、 $p'$  は「ここは海沿いの町である」である。 $r$  は「海のある町であれば、キキは降りる」である。この二つの前提から、帰結  $p$  「キキはこの海沿いの町で降りるコト」が導かれる。キキにとって、これは言うまでもないことである。しかし、ジジの発話からジジは命題が当然であると思っていないことがわかる。ジジの知識・信念には  $r$  が欠けている（あるいは活性化されていない）。そのため、ジジにとって命題  $p$  は不確かである。このことを察して、キキは「もちろん」を用いて隠された理由  $r$  の存在を訴え、命題  $p$  が当然であることをジジに伝えている。つまり、「もちろん」を用いることにより、聞き手の推測や期待を積極的に肯定するというよりはむしろ、自分の考えを聞き手に押し付けているのである。

また、(34) と (35) も同じ記述で説明することができる。

(34) [太郎はいい子である。そしてパーティに行きたい]

太郎「僕も行ってもいい？」

母親「もちろんいい。」 (29) を改作)

(35) [ほかのゼミの合宿に参加したい学生 A]

A「わたしも行ってもいいですか」

B「もちろんだめです。」 (= (12))

(34) では、 $p'$  は「太郎はいい子である」。 $r$  は「いい子であれば、パーティに行ってもいい」である。この場合、太郎にとっては命題「太郎がパーティに行ってもいいコト」が不確かである。一方、母親は  $p'$  と  $r$  という知識・信念をもっているため、「太郎がパーティに行ってもいいコト」が当然であると認識している。母親は太郎に命題が当然であることを認識させるために、「もちろん」を用いる。

(35) では、 $p'$  は「A はほかのゼミのゼミ生」であり、 $r$  は「ほかのゼミのゼミ生であれば、ゼミの合宿に行ってもはだめ」である。この場合、(34) と同様に、話し手 B は  $r$  という知識・信念をもっているため、B にとって命題は当然である。一方、聞き手 A の知識・信念には  $r$  が欠けている（あるいは活性化されていない）ため、命題「A が行ってはだめ」ということを認識していない。そこで、B はこの命題が当然であるこ

とを A に認識させるために、「もちろん」を用いる。

(34) と (35) は一見すると異なっているが、実際は同じ聞き手に自分の考えを押し付ける用法であると思われる。

このように、本稿の立場に立てば、先行研究の指摘するような用法はもちろんのこと、そのほかのいろいろな「もちろん」の用法を首尾一貫して説明することができる。

## 4.2 今後の課題

本稿では「もちろん」の基本的意味について考察を行ったが、具体的な文脈における様々な使用状況についての考察はまだ不十分である。例えば、「もちろん」には逆接表現と共起する用法がある。先行研究では譲歩用法であると説明されている（工藤1982）。同じような特徴を有する副詞には「確かに」がある。「もちろん」はなぜ逆接表現と共起しやすいのか、また「確かに」とどのような共通点を有するのか、ということは「もちろん」の意味と用法をよりの確に説明するためにも、考察すべき点であると考えられる。これらを今後の課題にしたい。

## 【注】

- 1) 本稿では、「もちろん」の発話者を話し手とする。「もちろん」の受け手を聞き手とする。
- 2) 単純真偽疑問文とは「Pである」可能性がある（あるいは、「Pである」可能性しかない）ことになっている文脈で用いられる疑問文のことである（井上・黄2007: 37）。
- 3) この例の後に、「だってさっき事故があったから、あなたが寝ていたけど」のような理由を入れることにより、「もちろん」が適切になるが、「もちろん」だけではやはり不適切である。その原因は、 $p'$  がすべての会話参加者に共有されている必要があるからである。
- 4) Chen and Yamada (2014) では *mochiron* の使用条件は以下のように規定されている。
 

(A) Felicity condition of *mochiron*

*Mochiron p* is felicitous, uttered in CG<sub>[Speaker, Hearer]</sub> such that

  - (i)  $p' \in \text{CG}_{[\text{Speaker}, \text{Hearer}]}$  &  $p \notin \text{CG}_{[\text{Speaker}, \text{Hearer}]}$  when
  - (ii)  $\text{PB}_{\text{Speaker}} : \exists r[(p' \cap r) \subseteq p \text{ \& } r \neq \emptyset, p]$  and
  - (iii)  $\text{PB}_{\text{Hearer}} : \neg(p' \subseteq p)$  (i.e. no such  $r \in \text{PB}_{\text{Hearer}}$ )

(以下、筆者による日本語訳を付す)

(A) 「もちろん」の適切性条件

「もちろん  $p$ 」は以下のような条件では適切である。



- (i) 話し手の知識・信念では、 $p'$  が会話の共通基盤に属している。かつ、 $p$  が会話の共通基盤に属していない。
- (ii) 話し手の知識・信念には、隠された理由  $r$  が存在している。また、「もちろん  $p$ 」の  $p$  は  $p'$  と  $r$  から導かれた帰結である ( $r$  はゼロ集合ではない)。
- (iii) 聞き手の知識では、 $p'$  から  $p$  が導かれない (つまり、聞き手の知識には  $r$  がない)。

## 【引用文献】

- Ito, Satoshi and David, Yoshikazu, Oshima. (to appear). On two varieties of negative polar interrogatives in Japanese. Michael Kenstowicz, Ted Levin and Ryo Matsuda(eds.) *Japanese/Korean Linguistics 23*. CSLI Publications.
- 井上 優. (1994). 「いわゆる非分析的な否定疑問文をめぐって」『国立国語研究所報告170研究報告集』15 国立国語研究所. pp.207-249.
- 井上 優・黄 麗華. (2007). 「日本語と中国語の真偽疑問文」彭飛(企画・編)『日中対照言語学研究論文集』

和泉書院. pp.35-57.

工藤 浩. (1982). 「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『国立国語研究所 研究報告集(3)』秀英出版. pp.45-92.

Chen, Joting, and Masahiro, Yamada. (2014). Context change with discourse makers. A poster presented at Formal Approach to Japanese Linguistics7.

Gunlogson, Christine. (2003). *True to form: Rising and falling declaratives as questions in English*. New York: Routledge.

森本 順子. (1994). 『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版.

森田 良行. (1989). 『基礎日本語辞典』角川書店. [第10版(2005)]

Stalnaker, Robert. (1978). Assertion. *Syntax and Semantics 9*. New York: Academic Press. pp.315-332.

## 【用例出典】

『魔女の宅急便』スタジオジブリ